

2019年度

SA

## 小論文

3月12日(火)

人文社会科学部

(社会学科)

10:00~11:30

【後期日程】

### 注意事項

#### 試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(3枚)に受験番号を記入しなさい。

#### 試験開始後

- 3 この問題冊子は、3ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚(表裏))を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 問題は、声を出して読んではいけません。
- 6 配点は、比率(%)で表示してあります。

#### 試験終了後

- 7 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

コミュニケーションの権利は、人権の一つです。コミュニケーションを禁じられたり、コミュニケーションが存在しなかったりする生活——刑務所への収監・接見禁止、社会から排除された移民などを、望ましい人間的な生活だと考えている人はいないでしょう。

最近、生存権とは、衣食住の保障(生活保護)だけでなく、貧困者やマイノリティを社会から排除せず、社会の中に包摂しなければ、人権の保障にはならない、ということが強く主張されるようになりました。それは言い換えれば、コミュニケーションの場を保障するということです。

なぜなら、人間は、個人であると同時に社会人であるからです。

(中略)

対話はコミュニケーションの始まりでもあり、コミュニケーションの中でとりわけ大きな役割を果たしています。

そのことを本能的に知っている親は、誕生直後の乳児に対してさえ言葉をかけ、乳児もまた親から働きかけられる言葉を待つている存在であり、応答しただけでいる存在なのだと確信しています。相手が分かっても分からなくても話しかけたり抱きあげたりして、乳児が反応らしきものを表現すると、大喜びしてさらに愛情を込めた働きかけを強めます。

乳児が応答しないときは、手を替え品を替えては子どもの応答をさそい、声には声を、笑顔には笑顔を、泣き声には緊急の反応を返して、子どもに応答されている安心感を与えます。

「対話は、個人の存在や発達の前提になっているだけではありません。

力づくで他者を征服しようとする暴力的手段を忌避して、人間として応答し合い、相互の利益をすり合わせ、合意によって解決しようとする、民主主義の土台にもなっています。人間が特権として持っている草の根の対話が下敷きになり、民主主義は実現されているのです。

思い出されるのは、東京大学教授であり、アイヌの民族的叙事詩『ユーカラ』を翻訳してこの世に伝えた言語学者、金田一京助の「片言をいうまで」(『科学画報』一九三二年に収録、のちに「心の小径」と改題、平凡社その他から出版)というエッセイの一文です。

金田一は、明治四〇(一九〇七)年の夏、口承のアイヌ語や叙事詩を収集するため、樺太クリヤトに赴きます。しかし、はるばる訪ねてきた金田一に対してアイヌの人は冷たく、がらんどうの住家にひとりぼつんと居るだけ。

「私の行く所、立つ所、誰もみな背をむけてしまい、口をつぐんでしまう。笑いさざめいていた者も笑いをおさめ、寄り合っていた者も散じてしまう。その淋しさはたとえようもない。……唾つばの上に言にさえ生まれて来たかのような寂寥を感じた」

四日目に外に出て、遊んでいる子どものスケッチをしていたところ、そばに寄ってきた子どもたちが絵の中の目を指して「エトゥ・フイー」と叫びます。一計を案じた金田一が、「何？」という言葉がほしくて、鉛筆でぐるぐる回るとわけのわからない線を描くと、子どもが首をかき上げて「ハマター」と言ったので、金田一が小石を指して「ハマター」と言い、草を指して「ハマター？」と言うと「スマ」「ムン」と次々に名前を覚えてくれるのでした。たちまち七四個の言葉を探集した金田一はうれしくなり、川原でマスを捕まえている大人のところに行つて、覚えてたの言葉を使います。すると、これまで顔をそむけていた人が、みなうれしそうに笑ひ、いろいろな言葉を投げかけてくれます。夜はがらんどうの住家に入りきれないほどの人が集まつて、踊つたり、歌つたり、しゃべつたりするようになります。金田一は書いています。

「たった、こうした間に、私と全舞台との間をささぎつていた幕が、いつぱんに、切つて落とされたのである。さしも越え難かつた禁園の垣根が、はたと私の前に開けたのである。ことばこそ堅くとざした、心の城府へ通う唯一の小道であつた」

「ハマタ(何)」というのは、応答を誘う言葉です。対話を始める言葉です。とくに金田一はアイヌの人に対して、偏見を持たず、軽蔑せず、口承の文化を持つ偉大な民族として尊敬する心を持つていました。相手の言葉を一心に聞こうとしました。対話するための、びつたりの資格条件を持つていたのです。彼が「ユーカラ」を翻訳できたのも、アイヌの人への尊敬を持つて対話することができたからだと思ひます。

本土から来た役人は金田一に問うています。自分たちがアイヌの人に話しかけても、みな難しい顔をして、そっぽを向いてしまふ。でも金田一が言葉をかけると、みな、うれしそうに笑顔で答える。その魔法の言葉は何か、と。

それは、「イランカラフテ(なつかしや)」というただの挨拶の言葉だったのでした。

対話とは、ただの言葉ではありません。その人が持つ、人柄、対話的な態度と生き方なのです。

人間のコントロール(倫理性)が働いている限りでは、市場での商品交換もまた、対話的手段の一つです。対話こそは暴力・戦争に対する真の意味での反対語なのです。

ところが、最近の社会は、対話しにくい、むしろ対話の価値を認めようとしていない社会になりつつあります。

市場の競争に勝つために効率性が優先されれば、個人的な対話から始まる考え方の共有や対話の中で生まれる新しい発想は、不確定でまだるっこしいやりに方に見えて、イライラさせられてしまいます。初めから結論ありきの会議では、一方的な伝達や職務命令を出す、てっとり早い結論の出し方が歓迎されます。論拠をあげて何かを言おうとすると、「つまり何が言いたいんですか」と、いなされてしまいます。

大規模な組織の中では、上意下達による管理がすでに習慣化していますから、自己防衛的意識を身につけた人びとは、会社の意向を付度し、自分が本当に感じている、疑問や意見を率直に言葉にすることを避けます。

定型化された通達や、簡便な電子機器による伝達が、いまや普遍的な意思疎通の手段と解釈され、主流になりつつあります。そのため、それだけでは意思疎通が十分でないと考える人が、個別に自分の体験を通しての具体的な情報を伝えようとしても、その機会がなかなか得られないのです。

(暉峻淑子『対話する社会へ』岩波新書、二〇一七年刊より、一部改変)

問一 筆者は「対話」を、どのようなものと捉えているか、二〇〇字以内で要約しなさい。(配点三〇%)

問二 傍線部について、本文の内容を踏まえながら、あなたの考えを、六〇〇字以内で述べなさい。(配点七〇%)